特集 子どもと動き

子どもの当たり前の動き

柴坂寿子

はじめに

筆者は幼稚園の子どもたちを入園から卒園まで継続して観察しています。入園からしばらくして、観察が積み重なってくると、子ども一人ひとりの動きは、その子どもの特徴として、普通に、日常に、当たり前に感じられるようになってきます。その子どもの動きの予測が立ってくるのかもしれません。

そんな当たり前になってきた子ども一人ひとりの動きが、当たり前ではないことに気づくことがあります。ここでは二人の子どもを取り上げて、そうした例を見てみたいと思います。なお、事例に登場する幼稚園は二年保育で、文中の年少とは四歳児クラス、年長は五歳児クラスのことを指します。

かおるの事例

かおるは、にぎやかで、おしゃべり好きな女の子です。ところが入園当初の記録を見返した時、かおるの動きがそれとはあまりに違うので、こんな姿があったのかと驚いてしまいました。次の事例に見

られるように、とにかく黙ってほとんど動かず、周りを見ているのです。

〈事例一〉 かおる　年少五月

かおるは入園式からひと月ほど経ったころ転入してきた。この日は転入五日目である。自由遊び時間の園庭。かおるは砂場の縁の外側で、砂場に向かいしゃがんでいる。砂場にはほかには誰もいない。かおるの前にはバケツがあり、かおるは砂の入った小箱を持っている。箱の中の砂を指先でいじる。

砂場脇にあるすべり台から、子どもたちが水をまき、大騒ぎになる。かおるはそちらを見る。クラスメイトのごろうが水から逃げるとそちらを、後方に話声がするとそちらを、ごろうが近くに来るとごろうの握っている砂を見る。園庭の遠くを見る。時どき砂をいじったり、箱の砂を見たりする。今度はすべり台下の砂場で子どもたちが水をまき、大騒ぎ。かおるはそちらを見る。砂を時どきいじる。

ごろうが正面に来て「なにやってんの?」と聞くが、かおるは答えず砂をいじる。ごろうはずっこけてから近くに立つが、かおるは顔を背ける。ごろうが去ると、かおるはまたすべり台のほうを見る。保育者が子どもたちに注意して、騒ぎが終わる。

かおるは持っていた箱の砂をバケツに出す。箱を振り、箱が空なのを確認するかのように見る。手の砂を払って立ち上がる。立ったままズボンの尻を触ったり、髪を触ったりする。子どもたちがすべり台を逆さに登るのを見る。指しゃぶりをする。

しかし、この後二週間経った次の事例では、もうこうした動きは見られません。にぎやかさはまだないものの、自分でどんどん動いています。高い所に掛けてある製作物を取ってもらうために、担任を待

つ間はじっとしていますが、その後はすぐに自分の活動に移っています。

〈事例二〉　かおる　年少六月

ままごとコーナーにいたかおるは、担任がてるに「輪つなぎの）続きやる？」と声を掛けたのを聞きつけて、「かおるちゃんもやる」と言って脱いでいた靴を履く。黒板の上にたくさんぶら下げてある輪つなぎ（子どもごとに製作中のもの）を見る。折り紙を取りに行く担任を追って移動する。担任が男児に頼まれ剣作りを手伝う間、立って待つ。

担任がかおるの輪つなぎを取って渡すと、かおるは机に行き、輪つなぎ作りの続きを始める。てるが輪つなぎを持って机に来る。かおるは「てるくん、こうやって見えなくなったでしょ。知ってるよ」と輪つなぎを目に当てて見せ、笑い顔。てるが前にやった、輪つなぎを目に当て「見えない」とふざける芸のまねである。てるは「うん」と言う。

てるの事例

次に、事例二の最後に出てきたてるが年長になってからの事例を紹介します。てるは製作や運動が得意で、ことば遊びが好きな男の子です。いつも、てるの朝は次の事例のように始まります。登園するとためらいなく、すぐに部屋に入ってきます。そして、そこにいる子どもたちとひとしきりおしゃべりをするのです。

〈事例三〉　てる　年長十二月①

九時十二分過ぎ、てるは登園するとすぐ、部屋に入ってくる。部屋でたいちと話していたしょうが、「あ、てる！」と指さし、てるを呼ぶ。てるは「ばかやろうです」と、おはようございますを言う調子で言い、手を挙げてあいさつする。てるはたいち・しょうに近づき、立ったままカードの話をする。

てるは、ふだん遅刻することはほとんどありませ

んでしたが、次の事例の日は、出がけにお母さんに急用ができ、家を出るのが遅れて遅刻しました。いつもはためらいなく、すぐに保育室に入ってくるてるが、立ち止まったまま、なかなか敷居を越えられません。部屋に入ってからも、立ち止まっては少し接近という動きを繰り返していました。登園から部屋に入るまで約五分、机に来るまでさらに約五分。筆者にもとても長い時間に感じられました。

〈事例四〉　てる　年長十二月②

九時二十一分ころ、部屋では担任を中心に、子どもたちが机で一斉に製作中。てるの母親は部屋に入り、担任に事情を説明する。てるは廊下でひくひく泣く。

担任と男児たち数名が廊下に出て、てるを囲む。担任はてるの頭をなでてなだめてから部屋に戻り、母親も帰宅する。男児たちはおしゃべりし、てるにも声を掛ける。てるはなかなか声が出ないが、やっと三言ほど話す。男児たちは徐々に部屋に戻り、てるだけ廊下に残る。ほとんど泣き止んでいる様子。

てるは敷居の手前に立って部屋の中を見る。廊下は暗いが、部屋の中は日が差して、輝くように明るい。廊下に出て来たなるとが、てるの肩をたたき、「そんなに泣くなよ」と声を掛けるが、てるは答えない。てるは下を向いて目を押さえひくひくする。

また部屋の方を見る。はやとが笑顔でてるを見て通り過ぎる。てるは部屋の中を見たまま。視線を落とし口に手を当て、ひくひくする。一歩後退する。せきをし、伸びをする。部屋の中を見る。口に手を当て、一歩前進する。時どき小刻みに体をひくひくする。

二歩前進して敷居を越え、やっと、部屋の中に入る。子どもたちが製作している机を見る。肩をすくめる。少し机に近づく。けいじが気づき、「やらないの？」と声を掛けるが答えない。しょうが「大丈

夫？」と声を掛けると、黙ったままゆっくり近づく。途中で立ち止まり、子どもたちがふざける様子を、頭をかき、指をしゃぶりながら見る。肩をすくめ首を手で押さえる。

けいじが紙を頭に当て、てるに向かってふざける。てるは少しずつ近づき、けいじの椅子の背に手を置く。しょうが何か言ってけいじが振り向き、てるに何か聞く。てるはうなずく。しょうが「かゆいの？」と聞くと、てるは目をこすり、「痛いの」と答える。

けいじたちが「わなげ」という壁の張り紙を声を出して読む。てるは「わなげ？　げなわ？」とふざける。しょうも同じようにふざける。てるは「わかった。なわげ」と、やっと笑顔になる。

当たり前の動き

いつもとは違う動きとして挙げた事例では、かおるの場合も、てるの場合も動きは少なく、動きがあっても大きな動き、早い動き、複雑な動きではありません。「砂場でじっとしていた」「泣いて部屋に入った」と、ひと言ですむ事例かもしれません。

では、かおるやてるにとってはどうなのでしょうか。二人の動きをもう少し細かいレベルで記述することで、その意味がより理解できるように思います。たとえば、かおるは砂をいじるだけで、目は遠くで子どもたちがにぎやかに遊ぶ様子を見ています。近づいてきたごろうからは目をそらし、声を掛けられても黙ったままです。ふつうなら答えるでしょうから、黙ったままということが、動きとして重要なのではと思います。不安な時や葛藤のある時出現しやすいと言われる指しゃぶりなど、自分の体に触れる動きもしています。かおるは不安もまだ大きく、かおるにとって子どもたちは興味はあるものの、まだ遠い存在なのでしょう。

同じように、てるの視線の先にも、楽しそうに製作する子どもたちがいます。そこに近づこうとしては立ち止まり、後退してまた前進し、合間には体をいじったり、リラックスしようとするかのように伸びをしたりしています。話し掛けられても黙ったままで、途中からやっと受け答えし始めます。ふざけに対してもなかなか乗りません。てるも本当は、いつものように遊びたいのに、気持ちを立て直すのにとても苦労しているようです。

このように、動きを細かいレベルでとらえて記述してみると、二人はひと言ではすまない長い時間を体験していたのではと実感をもって理解できるように思います。

継続して観察しているうちに、かおるについてもてるについても、活発に動いていく姿が筆者にとって当たり前になっていました。かおるが転入当初こんなに無口で動きがなかったことをすっかり忘れていました。すでに園生活が開始している中への転入は、活発なかおるにとってもたいへんな体験だったのでしょう。てるにとって、毎朝定時に登園することが、一日の始まりにとても大切で、それが崩れると、ここまで動揺し、動きがこんなに違ってくるとは、てるの毎朝の様子からは考えもつきませんでした。そういえば、てる親子に登園途中で会い、お母さんと筆者がおしゃべりをしていると、てるが「早く」とお母さんをせかしていたっけと、思い出しました。

当たり前に思われる動きを、いつもとは違う、動きの少ない事例と比較して見直してみた時、当たり前の動きが当たり前になるまでの時間があり、当たり前の動きを支えている何かが生活の中にはあるのだということを、改めて考えさせられました。

（お茶の水女子大学准教授）